

# 明・崇禎帝の諡号について（3）

The Posthumous Titles of Ming Emperor Chongzhen (3)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## (3)

(1) で検討したように、南明政権において崇禎帝の諡号（尊号）<sup>(1)</sup>は、

紹天繹道剛明恪儉揆文奮武敦仁懋孝皇帝

で一貫しているが、廟号は、

乾宗→思宗（正宗）→毅宗→威宗

と変更されて行った。そこでここでは、まず諡号（尊号）は何を示そうとしたのかを検討し、続いて時系列にしたがってそれぞれの廟号の意味するところを考えてみたい。

まず諡号の「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝皇帝」であるが、これらはどのような出典をふまえて撰せられたのだろうか。浅学の私が調べてみたところ、次のようなものではないかと考える。

最初の「紹天繹道」は、班固の「天引」の、

紹天<sup>つ</sup>闡<sup>ひら</sup>繹（天に紹ぎ繹を闡く：天地を受け政事を始める）。

を踏まえ、

「剛明」は、『新唐書』憲宗本紀に、

賛に曰く、……憲宗 剛明果斷なり。

とあるもの、または、『元史』憲宗本紀に、

帝（憲宗）剛明雄毅なり。

とあるのを踏まえ、

「恪恭」は、韓愈の「爲韋相公讓官表」に、

✓ (1) 『十七史商榷』の「尊號諡法廟號陵名」条に、つぎのようにある。

……凡そ此の〔皇帝に尊号を奉るといふ〕類は、皆な或いは諡と稱し、或いは尊號と稱する者なり。蓋し生まれながら尊號を上つるは固より唐に起る。前世 未だ有らざるなり。即ち歿して諡を上つるは、前世 亦た一字を用いるのみ。數字を連累する者無し。「至道大聖」が若きは皆な諡と爲すを得ず、故に尊號と云うなり。廟號に至りては、則ち「古者祖有功、宗有德（古者 祖に功有り、宗に德有り）」（『史記』孝文本紀 / 『漢書』景帝紀）なれども、其の功德の盛んなるを以てすれば、諡は之を盡すに足らず、故に又た追尊して祖・宗と爲し、加うるに美名を以てす、其の廟は則ち世々祀 祧（先祖と一緒に合祀する）せず。功有る者は必ず是れ開創す、或いは中興す。漢の光武の如きは始めて之に當るに足る。有德なれば則ち文（先王の法）を守り、統（帝位）を承くるなり。大抵、有功なるは必ず有德を兼ね、而れども有德は未だ必ずしも功を兼ねず。故に此の別有り。然れども「宗」を稱するの濫は、南北朝より已に然り、唐に至れば乃ち帝の「宗」ならざるは無し……（『十七史商榷』卷七十六・十四葉～十五葉・「尊號諡法廟號陵名」条）。

また、『萬曆野獲編』は、明朝の皇帝の諡は十六字であったといい、そこにいたる過程を以下のように述べる。

〔諡號〕大行（なくなればかりの皇帝）の諡號、本朝 俱に十六字を用う。説く者 以て過濫にして、前者 無みする所なりと爲す。此れ未だ之を考えざるのみ。唐の時の諡を用いるは、七字に止まると雖も、肅宗に至り已に増して九字に至る。又た懿宗の時に至り、諡を〔父の〕宣宗に加えて、元聖至明成武憲文睿知章仁聰明懿道大孝皇帝と爲すし、遂に十八字に至る。此れ開闢してより未だ有らざるなり。宋の太祖に至り、啓運立極英武睿文神德聖功至明大孝皇帝と諡して亦た十六字に至る。惟だ太宗のみ減じて六字と爲すは、稍や古に近しと稱さる。眞宗の崩ずるや、復た十六字を用う。此れより仁〔宗〕・英〔宗〕・神〔宗〕・哲〔宗〕・徽〔宗〕の五宗 十六字ならざる者無し。而して徽宗の大觀中に又た神宗に加えて體元顯道法古立憲帝德王功英文烈武欽仁聖孝皇帝と爲す。則ち二十字なり。尤も創見（まれに見る）と爲す。惟だ欽宗は減じて六字と爲す。而して南渡の高宗は、仍お十六字なり。以て孝〔宗〕・光〔宗〕・寧〔宗〕・理〔宗〕に至る。皆な之に循い用う。夫れ多詞もて繁稱するは誠に溢美（褒めすぎ）と爲す。然れども臣子の寸誠（わずかな誠）を以て、美を君父に歸すは、即ち意を揄揚（賞賛）に極むるなり。亦た可ならざるは無し。況んや往代の故事の倣う可き有るをや。論者 唐・宋の未だ有らざる所と云うに至るは、正に坐して精核ならざるのみ。若し必ず遼古（遠い昔）を以て準と爲せば、則ち文・武・成・康は止だ一字を得るのみ。即ち二字も已に贅（わづらわ）きなり。此れ〔皇帝の諡号の削減を求めた〕顔清臣（顔眞卿。字は清臣）も之を唐に得る能わざる者なり○嘉靖十七年、太祖に尊諡を加え上つて、亦た二十字に至る（『萬曆野獲編』卷十三・禮部・「諡號」条）。

①『舊唐書』德宗本紀上に「〔大曆十四年（七七九年）〕七月戊辰朔、日 之を蝕する有り。禮儀使・吏部尚書の顔眞卿 奏すらく、列聖の諡號は、文字繁多なれば、初めの諡を以て定と爲さんことを請う、と」。

臣 本と長才に非ず、又た敏識に乏し。學は經訓に通達すること能わず。  
 文 吏事を縁飾するに足らず。徒に知る、志を立つること廉謹にして、朋  
 勢の交わりを絶ち、官に處ること恪恭にして、請託の累を免るることを。  
 とあるのを踏まえ、

「揆文奮武」は、『書經』禹貢の、

五百里は綏服。三百里は文教を揆る。二百里は武を奮<sup>はか</sup>いて衛る。

を踏まえ、

「敦仁」は、『易經』繫辭上の、

土に安んじ仁に敦<sup>あつ</sup>し、故に能く愛す（安土敦乎仁、故能愛）。

を踏まえ、

「懋孝」は、『書經』太甲中の、

王<sup>なんじ</sup>乃<sup>つと</sup>の徳を懋<sup>なんじ</sup>め、乃<sup>なんじ</sup>の厥の祖を視て、時れ豫怠する無し。先に奉ずる孝  
 を思い、下に接する恭を思う（王懋乃徳、視乃厥祖、無時豫怠、奉先思孝、  
 接下思恭）。

などを踏まえて撰せられたのではないか。

こうした出典からすると、

天地を受け政事を始め、厳格ではっきりし、慎み深く、文教で治め武を以  
 て外を護り、仁に敦<sup>あつ</sup>く、きわめて孝である。

という皇帝であったといたかったのであろうか。

ただし、この中の「揆文奮武」について、顧炎武は次のように批判する。

臣（顧炎武） 又た恭しく烈皇帝（崇禎帝）の尊號（諡号）を讀むに「揆  
 文奮武」四字有り。按ずるに『書』經』禹貢に「[侯服の外側の] 五百里  
 は綏服。[その内側の] 三百里は文教を揆<sup>はか</sup>る。[その外側の] 二百里は武を

✓ ただし、ここでいう「十六字」は、いわゆる尊号の字数であり、廟号の後に付す  
 一字の諡は、含まれていない。したがって、廟号を除くと、『明史』でいうように、  
 十七字となる。

凡そ諡は、帝十七字、后十三字、妃・太子・太子妃並びに二字、親王一字、郡王二字、  
 字を以て差を爲す（欽定『明史』卷七十二・志第四十八・職官一・十九葉）。

奮いて衛る」と、孔安國の傳に「揆は、度なり。王者の文教を度りて之を行なう。三百里は皆な同じ」と、又た曰く「文教の外の外の二百里は武を奮いて天子を衛る。安んずる所以なり」と、蔡沈の傳に「綏服は、内 王城の[甸服と侯服の]千里を取り、外 [要服と]荒服の千里を取りて、内外の間に介す。故に内の三百里を以て文教をはか揆り、外の二百里は武を奮いて衛る」と。文義 甚だ明らかなり。之を尊號に用うるは、實に未だ安んぜざる所なり（『亭林餘集』・「廟號議」）。

顧炎武は、「揆文奮武」は、『書經』を踏まえているが、その意味するところは皇帝に用いるものではないという。そして、顧炎武は、

臣（顧炎武） 聞くに……禮部尚書の顧錫疇 素より古を考えず、一切の諡號は悉く其の門人の謝復元の撰定に聽く、と。不學の宗伯（禮部尚書）を以て、巷の小夫に任委す……（『亭林餘集』・「廟號議」）。

といい、この諡号を撰んだ顧錫疇と門人の謝復元とを批判する。

ではどうして不適切だと顧炎武は言うのであろうか。顧炎武は全文を引用しないが、蔡沈の傳はつぎのようになっている。

綏は安なり。之を綏と謂う者は、漸く王畿に遠く撫安の義に取る。侯服の外の外の四面は又た各々五百里なり。揆は度なり。綏服は、内 王城の[甸服と侯服の]千里を取り、外 [要服と]荒服の千里を取りて、内外の間に介す。故に内の三百里を以て文教をはか揆り、外の二百里は武を奮いて衛る。文は以て内を治め、武は以て外を治む。聖人の華夷の辨に嚴なる所以の者は、此の如し。此れ綏服五百里を分かちて二等と爲すなり（『書經集傳』禹貢・「五百里綏服、三百里揆文教、二百里奮武衛」条の蔡沈傳）。

王城から五百里四方が甸服、その甸服のまわりの五百里四方が侯服、その侯服のまわりの五百里四方が綏服、その綏服のまわりの五百里四方が要服、その要服のまわりの五百里四方が荒服である。ここで問題となる綏服の地は、内の王城と外の荒服の地の中間に位置しているので（内側は甸服・侯服。外側は要服・荒服）、綏服の中の内側の部分の三百里は文教を施し、外側の部分の二百里は

武を教えて外を防御させる。それは華夷の別を明らかにさせるためである、というのである。つまり顧炎武は、王城にいるはずの皇帝の尊号（諡号）に用いるにはふさわしくないと考えたのだろうか。

つづいて、廟号に擬撰された文字について検討してみたい。まず、廟号に附せられた「烈」字についてである。

### ①烈

(1) で検討したように「烈」字は、いずれの廟号にも附せられており、これについては余煜を除いて、反対意見はなかったようである。

まず、顧錫疇がつけた「烈」字については、高弘圖も問題がないとする。

壬戌（初六日）、南京禮部尚書の顧錫疇 擬して大行（崇禎帝）の尊諡を「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝乾宗烈皇帝」・[皇后に]「孝節貞肅淵恭莊毅奉天靖聖烈皇后」と上つる。蓋し列聖 繼美（前人の美德を継ぐ）なれば、諡號は幾ど偏し。廣く經史を參し、理として拘牽さるる無し。今、「烈」の一字は「詢謀すること僉<sup>み</sup>な同じ」（『書經』大禹謨：議論した意見が一致する）なり……（『國榷』卷一百二・六一一二頁・思宗崇禎十七年・「六月壬戌（初六日）」条）。

また、趙之龍も、諡法に「剛正を「烈」と曰<sup>い</sup>い、功有りて民を安んず・徳を秉<sup>と</sup>りて業を尊ぶを「烈」と曰う」とあることから「烈」字には異論がないとする。

[辛未（十五日）] 總督京營戎政少保兼太子太保の忻城伯の趙之龍 謂えらく、閣臣の高弘圖 先帝の尊諡を擬して「烈」と曰い、廟號を「思」と曰う。臣 諡法を按ずるに「剛正」を「烈」と曰い、「功有りて民を安んず」・「徳<sup>と</sup>を秉りて業を尊ぶ」を「烈」と曰う。此れ無庸易<sup>かえ</sup>（易るを庸うる無し）……（『國榷』卷一百二・六一一九頁・思宗崇禎十七年・「六月辛未（十五日）」条）。

ところが、余煜は、国が滅び、身を以て殉じた崇禎帝を、諡法のなかに「功有りて民を安んずるを「烈」と曰う」とある「烈」字で表現するのはふさわし

くない、と批判する。

……禮部の余煜 上言して曰う、……諡法に「功有りて民を安んずるを「烈」と曰う」と。今、國破れ家亡び、身を以て國に殉ず、何の「烈」なること之れ有らん。若し激烈の「烈」なれば、又た諡法の謂に非ざるなり。周の烈王・威烈王(晉の分割を認め、戦国時代となる)・漢の昭烈(三国蜀の劉備)・魏の烈宗(五胡十六国の前趙の第三代皇帝の劉聰)・唐の光烈帝(景宗：朱全忠に殺害される)は未だ嘗て殉難せざるなり。他日 之を史冊に書するに、將た諡法を按ずるや、諡法を按ぜざるや……(『小腆紀年附考』卷第九・清世祖順治二年二月丙子(二十三日)条)。

余煜は、崇禎帝の事績をふまえて評価すべきであるという意見なのであろうか。

朱右曾の『逸周書集訓校釋』(道光二十六年〔一八四六〕序)の「有功安民曰烈、秉德遵業曰烈」条の注に、

孔(晉・孔晁) 曰く、武を以て功を立つ・世業に遵いて墮せず、と。愚謂えらく烈は、業なり、光なり、と。○「秉」は『後漢書』陰皇后紀の注に「執」に作る(『逸周書集訓校釋』卷六・諡法第五十四・「有功安民曰烈、秉德遵業曰烈」条)。

とある。

また、陳逢衡の『逸周書補注』(道光五年〔一八二五〕刊)は、「有功安民曰烈」と「秉德遵業曰烈」とに注して、

功有りて民を安んずるを「烈」と曰う。

孔[晁]注：武を以て功を立つ。

補注：烈は功なり。周王喜は「烈王」と諡す。

德を<sup>と</sup>乗りて業に<sup>したが</sup>遵うを「烈」と曰う『後漢書』[皇后紀上の]「光烈陰皇后[諱麗華]の注に[「諡法」を]引きて「秉」を「執」に作る。又た[『後漢書』皇后紀下の]「順烈梁皇后」の注に[「諡法」を]引きて[「秉」を「執」に作る]。

孔[晁]注：世業に遵いて墮改せず。

補注：『爾雅』釋詁[下]に「烈は業なり」と。『[舊]唐書』盧奕列傳

に、天寶十四載（七五五年）、安祿山 東都を犯し、人吏 奔散す。〔盧〕奕 臺に在りて獨り居り、賊の執うる所と爲りて、李澄と<sup>とも</sup>に害せらる。兵部尚書を贈られ、太常 諡を議す。博士の獨孤及 議して曰く、謹みて諡法を案ずるに、「國を圖りて（國家のために謀り）身を忘る（生死を度外視する）を貞と曰い（圖國忘身曰貞）」（『左傳』昭公元年に「圖國忘死、貞也」）、「德を<sup>と</sup>乗り（美德を保持する）て業に<sup>したが</sup>遵う（世業を遵守する）を烈と曰う（秉德遵業曰烈）」。〔盧〕奕 憲を戎馬の間に執り、王室に藩たるを志すれば、「國を圖る（圖國）」と謂う可し。國危 拯う能わず之に繼ぐに死を以てすれば、「身を忘る（忘身）」と謂う可し。歴官 一十任、言 必ず正し、事 必ず果たせり。而して清節 <sup>みだ</sup>撓れず、之を去るに始めに至るが如ければ、「德を乗る（秉德）」と謂う可し。黃門 以て道左に執られし時、〔盧〕奕 之を嗣ぎて忠純なれば、「業に<sup>したが</sup>遵う（遵業）」と謂う可し。「貞烈」と曰うことを請う、と。之に従う（『逸周書補注』卷十四・三十二葉～三十三葉・「有功安民曰烈」/「秉德遵業曰烈」条）。

という。陳逢衡が引用するように、『舊唐書』によると、唐の盧奕に「烈」字を諡したのは、官僚として正しく、清廉であつたので、「德を<sup>と</sup>乗る（秉德）」であり、反乱軍に捕らわれながらも唐王朝に忠節であつたので、「業に<sup>したが</sup>遵う（遵業）」であつたからだとする。すると、「德を乗りて業に遵うを「烈」と曰う」という点から、崇禎帝に「烈」と諡するのは、適切であるとも考えられる。しかし、「功有りて民を安んずるを「烈」と曰う」に、「武を以て功を立つ」の意味があることからすると、崇禎帝の事績とは符号しない。余煜の指摘は、適切であろう。

また、明・孫能傳の『諡法纂』<sup>(2)</sup>には、

功有りて民を安んずるを「烈」と曰う（有功安民曰烈）。

德を<sup>と</sup>乗りて業を尊ぶを「烈」と曰う（秉德尊業曰烈）。

戎業 光有るを「烈」と曰う（戎業有光曰烈）。

剛正を「烈」と曰う（剛正曰烈）（『諡法纂』卷二・諡法上・五葉）。

とあり、「戎業 光有るを烈と曰う」が加えられている。ここからしても崇禎帝の諡号・廟號に「烈」字を加えるのには不適切であったと考えられる。

## ②乾宗

最初の擬撰された「乾宗」という廟號の「乾」字は、用例がない。ただ、陵号として、唐太宗の「乾陵」と遼の景宗の「乾陵」とがある。では、なぜ顧錫疇は「乾宗」と擬撰したのだろうか。『國榷』に次のようにある。

[崇禎十七年] 壬戌(初六日)、南京禮部尚書の顧錫疇 擬して大行(崇禎帝)の尊諡を「紹天繹道剛明恪恭揆文奮武敦仁懋孝乾宗烈皇帝」・[皇后の諡を]「孝節貞肅淵恭莊毅奉天靖聖烈皇后」と上つる……臣部(顧錫疇)は[廟号を]則ち恭しく擬して「乾」と曰う。[それは]先帝は十七年[の間]憂勤(国のことを憂慮してよく働く)にして、潛より亢にいたる(易の乾の卦:下から上まで)まで其の正を失わざるの義を得んことを庶[ついていたからである]……(『國榷』卷一百二・六一一二頁・思宗崇禎十七年・「六月壬戌(初六日)」条)。

崇禎帝は位にある十七年の間、国のことを憂慮してよく政務を執り、潛より亢にいたるまで(下から上まで)正しさを失わないことを思い続けていたので、潛より亢を含む「乾卦」から、「乾」字を用いたという。

ここでいう「潛」・「亢」は、『易』乾卦の「初九、潛龍、勿用」から「上九、亢龍、有悔」にいたる爻辭を指している。この卦が乾卦であるので、この「乾」

✓(2)『四庫全書總目提要』は、『諡法纂』を「存目」に分類し、つぎのようにいう。

明・孫能傳撰。[孫]能傳、字は一之。寧波の人。萬歷(曆)丙辰(萬曆四十四年[一六一六])の進士(『太學進士題名碑錄』の「萬曆四十四年進士題名碑錄丙辰科」条及び他の年の条には孫能傳の名はない。ただ、萬曆四十四年の三甲二百七十三名に、寧波府奉化縣の孫祭可がいる)。官は工部員外郎に至る。即ち嘗て張萱と同じく「内閣書目」を編する者なり。此の書は、詳しく易名諡を贈るの制を考う。首は功令、次は諡法、次は尊諡、次は臣諡なり。而して議論を以て焉を終う。大抵は内閣の冊籍に據りて鈔録し書を成す。其の例は頗る葉秉敬の「諡考」と相い同じくして、其の精密なるに及ばざるなり(『四庫全書總目提要』卷八十三・史部三十九・政書類存目一・「諡法纂十卷」条)。



字を踏まえて、「乾宗」としたのであろうか。ただ、諡としては用いられない文字である。

さらに、「潛より亢にいたる」とあれば、『易』乾卦の「亢」字が容易に連想される。この「亢」字については、蘇洵の「諡法」<sup>(3)</sup>に、

亢 二

高くして民無きを亢と曰う（高而無民曰亢）。

存するを知りて亡ぶことを知らずを亢と曰う（知存而不知亡曰亢）。

『易』乾〔卦〕上九の文言に曰く、「貴くして位无く、高くして民無し。賢人下位に在りて輔くること無し」と（繫辭傳上）。又た『易』乾卦に曰く、「亢の言爲るや、進むことを知りて退くことを知らず。存することを知りて亡ぶことを知らず。得るを知りて喪うことを知らず」と（「諡法」卷四）。

とある。「亢」は、「位が高すぎて、ついて来る民がいない」や、「生存することのみを知って、亡ぶこともあるということを知らない」などの意味であると

(3)『四庫全書總目提要』は次のようにいう。

宋・蘇洵（宋・大中祥符二年〔一〇〇九〕～治平三年〔一〇六六〕）撰。〔蘇〕洵、字は明允。曄（眉）山の人……周公諡法より以後、歴代の諡を言う者に劉熙・來奥・沈約・賀琛・王彦威・蘇冕・扈蒙の書有り。然れども皆な雜糅附益し、典要と爲らず。〔蘇〕洵に至りて奉けたる詔もて六家の諡法を編定す。乃ち周公・『春秋』・廣諡及び諸家の本を取りて刪訂考證し以て是の書を成す。凡そ取る所は一百六十八諡・三百十一條、新たに改むる者は二十三條、新たに補する者は十七條なり。別に七去・八類有り。舊文の有する所の者は刊削（削除）甚だ多し。〔しかし〕其の間の堯・舜・禹・湯・桀・紂は乃ち古の帝王の名なり、並びに諡号に非ずとするが如きは、前詔を沿襲し、概して載入を行なうは、亦た疎失を免れず。然れども之を諸家の義例に較べれば、要は嚴整と爲す。後、鄭樵の『通志』諡略は大都此の書に因りて之を増補するなり。且つ其の斷然として去取する所有り、善惡に一定の論有り。實に前人の及ばざる所なり。蓋し其の損益を斟酌する・字義を審定するは、皆な確として根據有り。故に禮家の宗とする所と爲る。其の中間に僻字を收め、今或いは盡く諸を施行する能わずと雖も、歴代相い傳うるの舊典なれば、猶おいて參考に備う可し……（『四庫全書總目提要』卷八十二・史部三十八・政書類二・「諡法四卷」条：「書前提要」も同じ）。

宋・蘇洵が勅命をうけて編纂したもので、欠点はあるものの、その選定には根拠があり、儀礼を掌る人たちの基づくものとなったというのである。

いうのである。顧錫疇は、この蘇洵のいう意味をふまえ、崇禎帝にはこの「亢」字が適切であると考えたものの、南明政権のもとではとうてい認められないとして、この「乾」字を擬撰したのであろうか。もしくは、顧炎武が、「不學の宗伯（禮部尚書）を以て、巷の小夫に任委す」（『亭林餘集』・「廟號議」）と批判するように、顧錫疇の不用意な擬撰であったのだろうか。

### ③「思宗」

高弘圖は、「思宗」と擬撰した理由を次のようにいう。

……先帝（崇禎帝）民隱（民衆の痛苦）を勤卹（憂い）し、食を懲らし廉を録し、屢しば詔もて蠲逋（焦げ付いた租税を免除する）し、六子を表章す。一たび寇する胡を聞くや、惻愴し寧きこと靡し。升遐（崩御）の日も猶お百姓に念及す。君師の義（『荀子』禮論「禮有三本。……君師者、治之本也」）は、先帝（崇禎帝）克盡し憾み無し。臣 故に諡法の「大いに兆民を省みるを思<sup>い</sup>と曰う」に就きて、其の鉅重を舉ぐ……（『國榷』卷一百二・六一二三頁・思宗崇禎十七年・「六月戊寅（二十二日）」条）。

崇禎帝は、民の苦しみを憂え、綱紀を肅清し、しばしば免税を行い、儒者を振興した。胡が侵略してきたことを聞くと、憂いて落ち着かなかった。亡くなる日も民のことを思っていた。このように、治世について、本分を尽くしたのであるから、諡法の「大いに兆民を省みるを「思<sup>(4)</sup>と曰う」によって、「思」字を撰んだ、と高弘圖はいうのである。つまり、高弘圖は、崇禎帝が民のことを思い続けていた（大いに兆民を省みる）と考えたことから「思」字にしたよう

（4）陳逢衡『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）には、

大いに兆民を省みるを「思」と曰う。

孔〔晁〕注：大いに民に親しみて殺さず。

補注：寒ければ則ち民の爲に衣を思い、飢えれば則ち民の爲に食を思い、貧しければ則ち民の爲に富の足るを思い、鰥寡・孤獨あれば則ち民の爲に存活を思い、儉惰縱佚なれば則ち民の爲に教化を思う。皆な「大いに兆民を省みる」の事なり（『逸周書補注』卷十四・二十六葉・「大省兆民曰思」条）。

とある。

である。

これを、余煜は、つぎのように批判する。

……禮部の余煜 上言して曰う、諡法を按ずるに、「道德純一なるを「思」と曰い」、「前過を追悔するを「思」と曰う」。先王 憂勤すること十七年、念念として堯・舜と爲らんと欲する者なり。[しかし]「家の造らざるに遭い」(『詩經』周頌・閔予小子)、亂階(禍い)頻りに起こる。而して用いる所の人 又た皆な君を欺くに忍くし、率いて國を誤るに致す。先帝に於いて何の咎あらん。「道德純一」たるは則ち貶むるに似たり。「前過を追悔する」は則ち譏るに似たり。揚ぐる[廟号]を覲るに於いて當る無きなり。且つ唐・宋以來、未だ「思」と諡する者有らず。周の思王・<sup>①</sup>[三国蜀] 漢の後主は<sup>②</sup>闇弱なり、何ぞ述ぶるに足らん……(『小腆紀年附考』卷第九・清世祖順治二年二月丙子(二十三日) 条)。

①兄の哀王を殺して自立するが、すぐに弟の考王に殺される。

②『三國史』蜀書三・後主傳・裴松之注に引く『蜀記』に「諡して「思公」と曰う」。

諡法には、高弘圖が提示した「大いに兆民を省みるを「思」と曰う」以外に、「道德純一なるを「思」と曰う」・「前過を追悔するを「思」と曰う」<sup>⑤</sup>ともある。崇禎帝はすぐれた政治を行なおうとしたが、災難が続いて起こり、任命した下臣が崇禎帝を欺いて、國家を転覆させた。ここからすると「道德純一」といえば、教化が臣下のものに及ばなかった崇禎帝を貶めることになる。また「前過を追悔する」とすれば、崇禎帝を批判することになってしまうと、余煜はいうのである。

明朝の臣である以上、ある程度の事実を反映させて諡号・廟号を擬撰するのは許されるものの、やはり明らかに批判するような内容を含んだ文字を選ぶことは受け入れられないのであろう。

なお、馬士英の討伐を旗印に南明政權に反旗を翻した左良玉は、その討伐の理由を述べた疏文の中で、崇禎帝の「思宗」という廟号を「毅宗」に変更したことを罪状の一つに数えている。

……「思宗（崇禎帝）」の諡を「毅宗」に改むるは、先帝 思うに足らずと明示し、以て天下の報仇復恥の心を絶つ……（『小腆紀年附考』巻第九・清世祖順治二年三月戊辰（二十五日）・「明左良玉舉兵反」条：『三垣筆記』筆記下には、「思宗（崇禎帝）」の諡を改めるは、先帝 思うに足らずと明示す。罪の一なり）。

ただ、この批判は「思」字の諡の意味からのものではなく、「思」字そのものの「思う」の意味に基づいてのものである。

#### ④正宗

(1) で検討したように、「正宗」という廟号は、顧錫嘯が自分の擬撰した「乾宗」を改めて提出しなおしたものである。どうして「正宗」に変更したのかについては、よくわからない。

『逸周書』諡法解には、

内外 賓服するを正と曰う。<sup>(6)</sup>

✓ (5) 陳逢衡の『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）の「道德純一曰思」条では、「道德純一」をつぎのように解釈している。

孔〔晁〕注：道大にして徳一なり。

補注：周王叔は「思王」と諡す。『書〔經〕』堯典の馬〔融〕の「欽明文思」に「〔道德純備するを思と曰う〕と」注するは、俱に「諡法解」を用ゆ。鄭〔玄〕「明」・「文」の二義に注するに諡法を用ゆ。〔ただし〕其の「事を敬しみ用を節する之を「欽」と謂う」・「慮 深く通敏なる之を「思」と謂う」は、則ち又た他義を雜取す。然らば此れを以て堯典「文思」の孔〔安國〕・馬〔融〕・鄭〔玄〕三家の傳うる所は、本より俱に是れ「思」字の諡法解と同じきを證す。『後漢書』鄧壽傳注に「鄭〔玄〕『〔尚書〕考靈耀』に注して云う、道德 純備なる之を「塞」と謂う。〔寛容にして覆載（皆をおおい載せる）なる之を「晏」と謂う〕、と引く。「塞」は命ち「□」なり。「思」と「□」とは聲の轉なり（『逸周書補注』巻十四・二十五葉～二十六葉・「道德純一曰思」条）。

また、「追悔前過」をつぎのように解釈する。

孔〔晁〕注：曰く、思いて能く改むるなり。

補注：此れ即ち『論語』の「内に自ら<sup>せ</sup>改むる」の義なり<sup>①</sup>。前に「前過を追補するを剛と曰う」。「剛」は「補」字の上に在りて看、此の「思」義は「悔」字の上に在りて看る（『逸周書補注』巻十四・二十六葉・「追悔前過曰思」条）。

とある。

また、蘇洵「諡法」の「内外賓服曰正」条には、次のような説明がある。

正・不正の相い去ること甚だ遠し。然れども不正の人は肯て自ら其の正なる者に服すること有る無し。此の如ければ則ち邪・正 終に辨ず可からざるなり。故に其の効を擧げて曰く、惟れ衆人の同じく服する所の者は正なり。天下の議は惟れ衆を最も公なりと爲す。苟し其の不正の服する者有りと雖も、内外を服する能わず、と（「諡法」卷二）。

「不正」の人は、あえてみずから「正」なる人に従おうとはしない。そのため、邪と正とは弁別できない。そこで、衆いことは「公」であるから、皆が承認したことを「正」とする。そうでなければ、「不正」が「正」に従ったからとしても、内外を服したとはできないというのである。

この「賓服」は、『禮記』樂記に、

樂は中より出で、禮は外より作る……樂 至れば則ち怨み無く、禮 至れば則ち争わず。揖讓して天下を治めるとは、禮樂の謂いなり。暴民 作らず、諸侯賓服し、兵革 試いず、五刑 用いず、百姓 患い無く、天子 怒らず、此の如くなれば則ち樂 達す……（『禮記』樂記）。

とあるのに基づいている。心の中より生ずる「樂」が広く行き渡った状態では、遠方の諸侯が来り服従するというのである。

すると、「正宗」という廟号は、内外すべてが服従するような正しい心を広く行き渡らせた君主であった、ということを表現したかったのであろうか。しかし、崇禎帝の治世は、内外が賓服するような状況ではなかった。「正宗」という廟号がほとんど取り上げられて議論されることはなかったのは、やはり崇

✓ (6) 陳逢衡の『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）の「内外賓服曰正」条では、つぎのように解釈する。

内外賓服曰正

孔〔晁〕注：正を以て之を服するを言う。

補注：正は治なり。後漢に節鄉正侯の趙意有り（『逸周書補注』卷十四・五十葉・「内外賓服曰正」条）。

禎帝の治世の現実のとは大きく隔たりがあったためではないだろうか。

### ⑤ 毅宗

余煜は、「思」字・「烈」字を批判した後、崇禎帝の廟号として「毅宗正皇帝」と擬撰する。これまでにない廟号であるからだというのである。

〔順治二年二月〕丙子（二十三日）、明「思宗」の廟號を改め「毅宗」と曰う〔考に曰く、『南都甲乙紀』は以て甲戌（二十一日）の事と爲す〕。

禮部の余煜 上言して曰く……「思」・「烈」二字は誤りを舉ぐと曰うなり。然らば則ち諡は宜しく何と云うべけんや。先帝の英明神武なるは、人の共に飲<sup>うやま</sup>う所なり。而して内に聲色・狗馬の好み無く、外に神仙土木の營無し。難に臨みて慷慨し、國君 社稷に死するの義に合す。千古未だ有らざるの聖主なり。宜しく尊ぶに千古未だ有らざるの徽稱（すばらしい諡）を以てすべし。古今を考訂し、已むを得ずして其の似たるを擬するに、當に諡して「毅宗正皇帝」と曰うべし、と。之に従う（『小腆紀年附考』卷第九・清世祖順治二年二月丙子（二十三日）条）。

人々に認められるようなすぐれた資質を持ち、個人的な趣味を迫及することもなく、国に殉じた崇禎帝は「千古未だ有らざるの聖主」である。だから、これまでにはないようなすばらしい諡を撰ぶべきであるというのである。

余煜が擬撰した「毅」字は、『逸周書』諡法解には見えない。ただ、蘇洵「諡法」に、

果を致して敵を殺すを毅と曰う<sup>①</sup>（致果殺敵曰毅）。

①『左傳』宣公二年に「君子 曰く、禮を失い命に違ふ、宜なり其の禽と爲るや。戎（戰場） 果毅を昭らかにして以て之（軍令）を聴く、之を禮と謂う。敵を殺すを果と爲し、果を致すを毅と爲す。之を易うるは戮なり、と」。

強くして能く斷ずるを毅と曰う（強而果能斷曰毅）（「諡法」卷二）。

とある。蘇洵が基づいた『左傳』によると、敵を殺すことを「果」といい、その「果」に徹することを「毅」とするという。また、「毅」は、果斷である

ことも表わす

これは、崇禎帝の事績とは合わない。余煜は、崇禎帝がこのようなあつてほしかったという願望を込めて「毅」字を選んだのであろうか。ただ(1)で述べたように、「毅宗」は、西夏の第二代皇帝の李諒祚の廟号に用いられており(『宋史』巻四百八十五・外國一・夏國上)、これまでにない廟号というわけではない。

なお、廟号の後に付された「正」字については④参照。

## ⑥威宗

(1)で検討したように、崇禎帝の廟号は、隆武年間に「威宗」に変更されている。これも、変更の経緯は分からない。

『逸周書』諡法解によると、「猛きこと剛果を以てするを威と曰う」・「猛きこと彊果を以てするを威と曰う」・「彊義もて正を執るを威と曰う」とある。

『逸周書補注』では、つぎのように補注がなされている。

猛きこと剛果を以てするを威と曰う。

孔〔晁〕注：猛は則ち少寛・果敢の行なり。

補注：欽定『續通志』諡略に曰く、凡そ「桓」の諡は或いは「威」に作る。後人の避諱に困りて改むるなり。周の威烈王及び桓公の子の威公・齊の威王・嬰・齊の楚威王・商は則ち是れ其の本の諡なり。諱むに困りて改むるに非ず。

猛きこと彊果を以てするを威と曰う。

孔〔晁〕注：彊は剛より甚だしきなり。

彊毅信正なるを威と曰う。盧文弨曰く、「〔史記〕正義」は「彊義執正」に作る。

孔〔晁〕注：信正は邪無きを言うなり(『逸周書補注』巻十四・二十四葉～二十五葉・「猛以剛果曰威」・「猛以彊果曰威」・「彊毅信正曰威」条)。

また、蘇洵「諡法」では、

威 三

賞もて勸め刑もて怒るを威と曰う。

## 新補

刑を以て遠きを服すを威と曰う。

強毅にして正を執るを威と曰う（「諡法」卷二）。

とある。

このように、「威」は、あまり寛容ではなく、猛々しく剛毅果断であるというイメージを示す文字であった。すると、崇禎帝にはあるていどは当てはまるようでもある。

ただし、『逸周書補注』で「凡そ「桓」の諡は或いは「威」に作る。後人の避諱に因りて改むるなり」と言い、「威」字が「桓」字と通行していると述べている。

この「桓」字はよくない文字とされていたようである。ただし、『通志』諡略ではそれを否定する。

諡法を按ずるに惡諡は「桀」・「紂」に如くは莫し。其の次は「桓」・「靈」に如くは莫し。其の次は「幽」・「厲」に如くは莫し。此れ古今の聞する所なり、と。臣の見る所を以てすれば、皆な然らず。……「桓」は經典に於いては竝びに惡義無し。公 桓圭を執る（『周禮』春官・大宗伯）の「桓」は乃ち珪璋の首なるが如し。「桓桓たる武王」（『詩經』周頌・桓）の「桓」は乃ち果毅の盛徳なるが如し。齊の桓公<sup>も</sup>用って覇業を能くし、周の桓王は元より累行（業績）無し。安くんぞ「桓」もて惡名と爲すを得んや……（『通志』卷四十六・諡略第一・序論第三）。

蘇洵『諡法』には、

舊法に「克<sup>よ</sup>く亟<sup>すみ</sup>やかに民を動かすを桓と曰う」・「四方を武定するを桓と曰う」と曰うを新たに改む。「克<sup>よ</sup>く亟<sup>すみ</sup>やかに民を動かす」の行ないは惡諡なり。「四方を武定する」の行ないは善諡なり。「桓」とは、剛勇・亟切の害せざるの稱なり。遂に惡と爲す可からず、亦た遂に其の善を許す可からず。故に之を合わせて「克<sup>よ</sup>く亟<sup>すみ</sup>やかに功を成すを桓と曰う」と曰う。齊の桓は管仲の刑名の術を用いて以て天下に伯（覇）たり。而して諡して「桓」



と為すは則ち「克<sup>よ</sup>く<sup>すみ</sup>亟やかに功を成す」の故なるか（『諡法』卷二・「克亟成功曰桓」条）。

と解説がなされ、善悪の意味があったという。

すると、「威」字が通行する「桓」字は、『通志』においては否定されるが、蘇洵が述べるように、善悪の意味がある紛らわしい文字であったようだ。こうしたことからすると、「威」字は、やはり不適切であったといえるのではないだろうか。

以上、検討してきたように、乾宗・思宗・正宗・毅宗・威宗などの廟号は、それぞれ不適切な面をもっていた。これは、明王朝を継承した南明政権としては、亡国の君である崇禎帝に、そのままの意味をあらわす廟号を撰することはできなかったからであろう。そのような文字を撰べば、先君を批判することになってしまうからである。

しかし、次の清政権は、そうではない。つづいて清政権が崇禎帝に贈った諡号・廟号を検討してみたい。

(つづく)